

三扇寮 一一号室

私が学生時代にお世話になった寮は三扇寮という。校章が三つの扇から出来ているので、そんな名がついたのだろう。何故三つの扇かの由来は最初から知らないままでいた。

定員百八名の四人部屋、二七号室まであってA棟、B棟に別れていた。寮にいたのは三年間で、一年生のときは二〇号室、二年生のときは一四号室、三年生のときは一号室の住人となった。

寮では三年生は神様、二年生は平民、一年生は奴隷と決まっていて四年生になれば、ご昇天となり出て行かなければならなかった。従って私の寮生活における住み心地度は一一号室、一四号室、二〇号室の順となる。

私で一一号室は七代目。当主の私の他は二年生のK君、一年生のT君、M君の四人世帯であった。もともとわがままな私は三年生になり益々磨きがかかっていたから、親切な三人の後輩のお陰で神様以上の生活を楽しんだ事は言うまでもない。

K君は長身の男前で、尚且つ気配りの出来る人だったから一一号室の次席家老的存在であった。後輩の二人も彼がいたからこそ私のわがままに耐えてくれたのかもしれない。

ない。四年生になり、退寮する時には彼と一緒に連れて行き、一軒家を借りて隣の部屋に住まわせ面倒を見てもらったのは正解であった。家主の親父に気に入られ、是非とも娘を嫁に貰ってくれと懇願された幸せ者でもある。

T君、M君はそれぞれ福島、北海道から来たいわゆる奴隷であるが二人とも北国育ちのせいか我慢強く、部屋の掃除からラーメン作りまで文句も云わずによく働いてくれた。不平、不満は相当溜まっていたに違いないが何故か四人は仲が良かった。K君のお陰と思っている。

一一号室時代の一番の思い出は学生運動たけなわの際の食糧不足であった。もともと寮は食事付きであったがストライキを打ったかどで大学側のしっぺ返しに会い兵糧攻めとなつて、約一か月間も賄いのオジサンとオバサンが居なくなつてしまったのである。当初こそ外食で済ませていたが、貧乏だからこそ学生寮に入っている我々に金欠病はすぐにやつて来た。四人の金を出し合つて凌いでいたが、いよいよ最後となつた日にT君が米を少々とカレー粉を差し出した。登山が好きだった彼が非常食として隠し持っていたものである。

野菜など有るわけもなく、お粥状のご飯に直接カレー粉をかけてT君スペシャルカレーは出来上がった。残念ながらこのカレー、食べた記憶はあるが美味しかった記憶

はない。ただし四人が思い思いの食器でガツガツ食べる姿を写真に残し、色紙にサインをして部屋の天井に貼り付けた事が後日に貴重な記念となった。

四人は卒業後バラバラになってしまったが、今も定期的に再会のチャンスを作っている。平成元年に群馬の霧積温泉に集合した際、学生寮を見に行こうという事になり、二十年振りに一一号室を訪ねてみた。幸いにも一年後には寮が取り壊されるといふ事を知り、例の色紙を回収する事が出来た。セピア色になっていたが若かりし日の自分との再会に全員、涙がこぼれそうになった。



色紙は現在私の手元にある。三十年の歳月を経ても酒とタバコと即席ラーメンの匂いが染み付き、耳元に近づければ寮生の夜の喧騒が聞こえてくる。思えば歳をとったものだ。

平成十一年 著